

楽聖ルードヴィッヒ・ファン・ベートヴェンの Plaudite, amici. Comoedia finita est. について

前 川 金 治

40数年前に指揮学で師事した我国楽壇の大御所、故 山田耕筰先生が昭和 25 年に近江兄弟社発行の月刊『湖畔の声』7月号誌上に次のような感想を寄稿されたことがあった。

『信仰なき者に真の芸術家は存在しないのです。芸術とは高きもの、聖きもの、尊きものを讃える祈りの声です。音楽は、ことにそうです。』



ウィーン郊外ハイリッゲンシュタットにあるベートーヴェンの家と筆者

ベートーヴェンの信仰

ヨハン・S・バッハやヨセフ・ハイドンのように直接教会の中で奉仕をした経験のないルードヴィッヒであるが、明らかな記録によるとルードヴィッヒ・ファン・ベートーヴェンは1770年12月17日にボンのレミギウス教会で幼児洗礼を受けたとある。彼の母マリア・

マグダレーナは親戚に聖職をもつ名望の家系から出た婦人であって、幼少のルードヴィッヒにカトリックの信仰を植え付けたことは見落とすことの出来ない事実である。彼が17歳になるまで、恵まれない家庭生活の中で重すぎる負担に健康を損い、ついに、肺病で倒れてしまった、この信仰の母だけが彼の心の支えであった。

セーヤーのベートーヴェン伝（2巻1049頁）によると「主治医が見込がないと言った時にベートーヴェンが「神との平和」をとり戻すよう、弟のヨハンが勧めたのに対し彼は最大の準備をもって、その言に従った。ついでカトリック教会の聖職による聖体拝領を会話帳に書いた時、ルードヴィッヒはそれを読み、全くこの世のものならぬ輝やいた顔になり静かに、しかも荘厳に手を出して司祭の先生を呼んで下さいと云った。

3月24日ルードヴィッヒはローマ教会の式で最後の聖餐式（聖体拝領）を受け牧師（司祭）に心から感謝を捧げた。

3月26日、戸外には雪がふっていた。午後5時すぎまで無意識であったルードヴィッヒは突然、彼の病室が大きないなずまで明るくなった、そしてつづいて大きな雷鳴がとどろいた時、目を大きく見開き、右手をあげ、こぶしをかためて、しばらく上の方を見ていたが、やがて、手をおろし、目をとじた。もはや、呼吸もなく脈はくも打たなかった。ルードヴィッヒ・ベートーヴェンはこの世を去った。1827年3月26日午後6時であった。

ミサはベートーヴェンにとって信仰の客観化ではなく、神との個人的な交りを意味した。彼は1807年にエステルハジー公のため最初のハ長調ミサを書き上げたが、ミサ・ソレムニスでは歌詞が全く彼の身につくまで、読みこなし又、原語の理解しがたい処はドイツ訳を求め、満足するまで研究する熱心さであった。

聖日の礼拝を欠かしたことの無い敬虔な新教徒ヨハン・S・バッハが生涯の傑作品として作曲した口短調ミサとは異なり、教会出席には甚だ不成績であったが、深い信仰を心の底にもつていたベートーヴェンが16世紀以後に作曲された凡てのミサの中での最大の作品を残した事は、少年時代から母によって与えられた神への信仰の現われであると言えよう。「フィデリオ」のピアノ・スコアの力作が完成した時、ベートーヴェンは「神の助けにより完了した。」とイグナツ・モシュレースが書いたのに対し、「人よ、汝自身を助けよ。」と書き加えた事は有名であるが、これはベートーヴェンの第2期から第3期に移り変わりの時期で彼の霊的争闘を示すものである。けれども、ミサ・ソレムニスの中で顕著に現われている彼の内面性「顔と顔と相対して神を熟視する」ことを忘れることが出来ない。

このミサ・ソレムニスは、その霊の偉大さと信仰の卓絶さにおいて最高のもので人間のあらゆる徳性と誤謬とを超越した祈禱文として永久に存在するであろう。この作品のためベートーヴェンは莫大な労苦を払ったが彼は彼自身に忠実に生き、「神は凡ての上にあります」の言葉に生き抜いた。

ベートーヴェンの蔵書

彼が死んだ時、所有していた書物は

シェクスピアの作品（翻訳）4冊

ホーマのオディッセー（J. H. Voss 翻）

スタームの Observations

ゲーテの Westöstlicheh Divan

以上いずれも赤鉛筆で多くの個所に註がついている。

この他にシンドラーによると

ホーマーの イリアッド

ゲーテの ウィルヘルム・マイスターとファウスト

シラーの 劇と詩

マティソンとスーメの 詩集

これらの外にベートーヴェン愛読の書の多くが紛失してしまった。

尚、彼の会話帳からも明らかなようにベートーヴェンの蔵書の中にはプラトーン、アリストテレス、プリニー、クセノホン、ユリピデス、クインティリアン、オーヴィッド、ミルトン、トムソン等の書物があった筈である。1827年9月7日付の競売表には少なくとも44冊あった。現在ベルリンのローヤル・ライブラリには134冊のベートーヴェンの蔵書が保存されている。

正規の基礎的な学校教育を十分受けることは出来なかったが、あらゆる必要な教養を身につけるための彼の努力は抜群であり、又彼の語学力もまた非凡であった。

1789年の5月14日に大学に昇格したばかりのボン大学で哲学や文学を受講したとキンスキーの著に書かれている。

聾 Deafness

身体障害者の中で一番気の毒なのは美しい音の世界から遮断され、時間的な芸術から全く見放された聾者である。我が国にも強度の難聴者を加算すると、こうした運命になやむ者は20万人に近い。筆者の扱った事例によれば、この聾者（一般には聾啞者と呼ばれる）を持つ家族や親族の悲劇は昔も今も数えきれない程である。ある時は、天刑病と思われ、そのための親子心中はその後をたたなかった明治、大正時代のようなことは今日ないとしても、全国にある百に余る聾学校（聾啞学校ではなく）で、1学級10人以下の行き届いた教育を受けることが出来ても、耳の聞こえないことには変りはない。第2次世界大戦後ストレプトマイシンの災いで一夜の中に失聴した青年達に出会った時、彼らを慰める言葉を持たなかった。突如失明した者、或いは、それ以上の失望と悲しみを聾者は生涯担わなければならない。

この残酷が、普通人より、はるかに鋭敏で完全であることを当然期待される、ベートーヴェンを見舞った。しかし、この悲惨な運命も、彼の祖母と父と2代続いた過度の飲酒の結果であることも見逃がすことは出来ない。

1802年のハイリゲンシュタットの遺書の中で、主治医のシュミット教授に、ベートーヴェンの死後すぐに、この不幸な病気のことを公表してくれるようにと依頼した。そうすれば、世の人は少くとも彼の死後、和解（彼の気むづしさ）してくれると考えられたからである。この願いは、シュミット教授が早く他界したので、ベートーヴェンの死（1827年3月27日）の翌日ウィーンの病理学者ヴァグナー博士により発表された。

この不治の病が、外界の音が全く聞こえなくなったベートーヴェンの音楽の創造力に何の支障をも与えなかったことは全くの奇蹟であったと言える。

1798年と99年、ベートーヴェンと共に暮した友人アメンダに1801年6月にこのような手紙を書いた。

「余の最も高貴な部分＝聴力＝が非常に悪くなってきた。君と一緒にいた時でもこの

事を感じていた。しかし、だれにも言わなかった。それ以来、日増に悪化している、

彼の聾を隠すため1799年以来ベートーヴェンは一切の社交を避けた。音楽会に出席してもオーケストラから少し離れると楽器の高音を聞くことが出来なかった。

1802年10月6日に記されたハイリゲンシュタット遺書の中でベートーヴェンは初めて彼の病気について詳しく書いている。1796年頃から腸の疾患が始まり1798年に聾の徴候が現われている。リースの不注意により、フルートの音が聞えなかったので、ベートーヴェンに大打撃を与えたのは1802年の夏のことであった。この最悪の失望の時にも、神の恵みにより、彼の創造力は帝王のように堂々たるものであった。『エロイカ』の精が『前進』と内から叫び出したのはこの時であった。あたかも、主イエスの御言にしたがったペテロが波の上を歩いたように、ベートーヴェンは絶望の中から力強く歩き出した。

もはや、彼は鼓膜を通じ感得される物質的振動には無感覚であったが、内的な振動、即ち、神が与え給う靈魂の振動にベートーヴェンは更に鋭敏になり、脈うつ生命の躍動を感じた。彼の作品に豊かな実りを与えた創作の第2期は、自殺を計るまでに彼を追いつめた失望のどん底から彼が希望をもつて立ち上った時に始まる。

それにしても、自殺寸前のベートーヴェンにこの力を与える根底となった『コリント人への手紙』第一の13章を忘れることは出来ない。

“愛はいつまでも絶えることがない。しかし、予言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれるであろう。なぜなら、わたしたちの知るところは一部分であり、予言するところも一部分にすぎない。企きものが来る時には、部分的なものはすたれる。わたしたちが幼な子であった時には、幼な子らしく語り、幼な子らしく感じ、また、幼な子らしく考えていた。しかし、おとなとなった今は、幼な子らしいことを捨ててしまった。わたしたちは、今は鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔を合わせて、見るであろう。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう。このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である。”

＝新約聖書コリント人への第一の手紙 13章 8節～13節＝

(日本聖書協会訳)

語 録 か ら

何々語録が昔も今も、その著者が偉大であればある程、ひろく、永く重宝される。ルドヴィッヒ・ベートーヴェンは、失聴の故に多くの会話帳をのこしたが、これらとは別に **FRIEDRICH KERST** の労作 **THE MAN AND THE ARTIST, AS REVEALED IN HIS OWN WORDS** の中から本題に関係をもつもののいくつかを拾ってみた。

非常に興味あることはカトリックとして育てられ、聖日礼拝には余り出席していない彼がプロテスタントのパウロ書簡中に記録されている言葉を数多く用いていることである。彼の愛読書の一つであった **Observation Concerning the Works of God in Nature** よりの感化もさることながら、新約聖書に多大の関心を持ち、愛読していたことも疑う余地はない。

1812年9月末、カレンベルグにて

全能者よ
森の中で
余は祝福されている
すべては幸福である
森の中で
すべての木は語る
御身を通じて。

お、神よ！
何たる栄光ぞ
森林の中で
高きところには
平和あり
神に仕える
平和。

1818年の日記から

自然は心のための栄光ある学校である。申し分なし。余はこの学校の生徒となり、その教訓を熱心に学ぼう。ここで余は知恵を学ぼう。ここで余は神を知り、又神の知識により天国の前味を発見しよう。

1818年の日記より

真の教会音楽を書くため、古い修道院のコラール、詩の正しい翻訳、そしてカトリック詩篇歌の作詩法に目を通す。

1822年12月20日

もし収入の心配がなければ、教会音楽に専念したいものだ。

1818年 夏 バーデンにて

レクエムは静かな曲であるはずだ。
メトロノームは不要だ！ 音感覚をもっている者には無用の長物だ！ 又、音感覚をもたない者はメトロノームから何の益も得られない。

ベッティア・フォン・アルニム へ

余は一人の友もない、余は孤独だ。しかし、神は、余の同業の者たちよりも、はるかに余に近くなりますを知る。余はおそれなしに神と交わり、つねに神を認めている。

シンドラー へ

シェクスピアー作の『テンペスト』を読みなさい。

ルドルフ公の教訓帳より

凡てのものは時の審判を受ける。ただ善で真実なもののみ岩のように永存する。凡ての人は正しい事を行い、ゴールに向い全力をつくして斗争せよ。そして恵み深い創造者なる神が与え給う贈物を、最後の息をつかい果しても入手せよ、人生は短く 芸術は長い。

1824年フロイデンプルグへ

純正の教会音楽は声楽でなければならない。『グロリア』は別である。この理由で余はパレストリーナを好む。しかし、信仰なしに彼を真似ることは愚である。

1820年1月7日 甥カールの後見人として

小供を育て又教育することほど神聖な義務はない。

1822年7月26日 ピター へ

余にとって神の次に最高と考えるのは『名誉』である。

1824年9月9日 ジョージ・ネージェリー へ

ただ神聖な芸術のみが天上の音楽へ余の人生の最上の部分を捧げる力を与えてくれる。

1808年頃 マリー・ビゴット へ

余は幼少の時より美であり又善である凡てのものを愛するように教えられた。

1787年9月15日 シュード博士へ

『母』と言うあの美しい言葉を発音し又それを聞くことが出来た時、余は世の中の何人よりも一番幸福であった。しかし、今は母と呼ぶ人はいない。

ラルフ大公の教訓帳より

なにか有益なことを学ばない日は失われた日となる。時は人間にとって非常に高尚な又高い価値のあるものだ。今日、出来る事を決して明日にのぼしてはならない。

1812年9月 アマリ・セバルド へ

余が音楽の中に表現し得ると同じ様に余の病気を適確に表現し得るならばどんなにか世人の誤解を免れ得たものを！

1812年の日記より

霊をはなれた官能的快樂は野卑であり、常に野獸的になる。一度この快樂を経験する者には悔のみが残る。

1812年8月15日 ベッティナ へ

善なる霊をもつ以外に善はない。このことは凡の物ごとの中に現われ、又かくす必要のないものである。

ストライヘル へ

今日は日曜日だ。福音書から読んであげようか？ 『汝ら、たがいに相愛せよ』

1812年の日記より

惜みは、それを養う人々にかえる。

1810年8月11日 ベッティナ へ

希望は余に力を与える。希望は世界の半分を力づけ、そして、いつも余のそばにいた。もし、希望がなければ余はどのようになっていたであろう！

1818年日記

神よ、平和の中に余の凡てを聖手に捧げまつる、神の変ることなき恵みと御憐れみを信じつつ。

1815年10月19日 エルデディ へ

有限のわれわれに無限の霊が与えられ、喜びと悲しみのため生れてきた。そして、たしかに言い得る事は、悲しみを通して真の喜びが与えられる。

日記（年月不明）

凡ての上に神がいます。彼はいます、神なしには凡ては空である。

1824年 ランペル へ

恵み深き方と呼ばれ得るのは只一人なり。それは神御自身である。

1824年 スコット へ

天上にいます偉大なる音の創造の音楽に比べ得るものがあるか？ 天上の、天上の、天上の、いと高き聖者！

1823年8月 ルドルフ大公 へ

他の者より、さらに近く神の御前にくることが程、高潔な使命はない。神の御光を人類の中に伝えしめたまえ。

1816年の日記より

神は型をもちたまわない。我らは彼を見ることが出来ない。しかし、神の成し給える聖業により、神は永遠で、全能で、全知で全在する御方であると知ることが出来る。

スターンの記録から

神の御恵みを贅えて余は告白しなければならぬ。神は凡ての方法で余を神に近づけ給うた。時として、神は、余が御旨にかなわぬ道に行く時、神の重き御手を感じさせ、又数多くの懲らしめをもって余の高慢な心をへり下らせたもうた。病氣と不幸を神は余に与え、誤れる道より、ただ一人の父なる神にかえらしめたもうた。

神よ、余を導き、あらゆる事の中に神に向わしめ、つねに、善き業の実を結ばしめたまえ。

ウィーンの Pathological Museum に保管されている Joh. Wagner 博士が書いたベートーヴェンの死体解剖の報告書

≈……Der Ohrknorpel zeigte sich gross und regelmässig geformt, die Kahnförmige Vertiefung, besonders aber die Muschel desselben war sehr geräumig und um die Hälfte tiefer als gewöhnlich ; die verschiedenen Ecken und Windungen waren bedeutend erhaben. Der äussere Gehörgang erschien, besoners gegen das verdeckte Trommelfell, mit glänzenden Hautschuppen belegt. Die Eustachische Ohrtrumpete war sehr vedickt, ihre Schleimhaut angewulstet und gegen die knöchernen Theil etwas verengert. Vor deren Ausmündung und gegen die Mandeln bemerkte man narbige Grübchen. Die ansehnlichen Zellen des grossen und mit keinem Einschnitte bezeichneten Warzenfortsatzes waren von einer blutreichen Schleimhaut ausgekleidet. Einen ähnlichen Blutreichthum zeigte auch die sämmtliche, von ansehnlichen Gefässzweigen durchzogene Substanz des Felsenbeines, insbesondere in der Gegend der Schnecke, deren häutiges Spiralblatt leicht geröthet erschien. Die Antliznerven waren von bedeutender Dicke ; die Hörnerven dagegen zusammengeschrumpft und marklos, die längs derselben verlaufenden Gehörschlagadern waren über eine Rabenfederspule ausgedehnt und Knorpelicht. Der linke viel dünnere Hörnerve entsprang mit drei sehr dünnen graulichen, der rechte mit einem stärkeren hellweissen Streifen aus der in diesem Umfang viel consistenteren und blutreicheren Substanz der vierten Gehirnkammer. Die Windungen des sonst viel weicheren und wasserhältigen Gehirns erschienen nochmal so tief und (geräumiger) zahlreicher als gewöhnlich. Das Schädelgewölbe zeigte durchgehends gross Dichtheit und eine gegen einen halben Zoll betragende Dicke……≈

このようにベートーヴェンの耳の軟骨は通常型の型であるが鼓膜がかくれる程にこのあたりの筋肉の角度は普通人の一倍半も深い。ユースタキ氏管も非常に厚く、粘膜は少し骨部に引きよせられている。扁桃腺の近くに癩痕状の穴がある等々詳細な解剖学的説明が報告書に記されているが、ベートーヴェンの脳については密度が特に堅固で、脳中の水は比較的少量である。脳のしわは普通人の2倍も深く、その数も非常に多いと記録されている。

創造の神は、音楽家としての将来を大いにしよく目され、又当人も壮大な夢をもって世界の音楽の都ウィーンの社交界で頭角を現わそうとした時に彼から聴覚を奪い取りたもうたが、それにも増して内にある靈魂の耳を開き、外部の雑音を遮断して、さらに崇高なるもの、さらに聖なるものへと彼を追いやりたもうた。

ハイリゲンシュタットの遺書

1802年10月6日にベートーヴェンが残した文章を諸井三郎氏の名訳で掲げてみる。

≈わが弟カール……

おお、お前達よ、お前達はわたしを片意地な強情張りの人ぎらいと思い、かつ、うわさしている。それは、わたしに対し何という間違いだろう。お前たちはお前たちにわたしがそのように見られる、かくれた原因を知らないのだ。わたしの心も精神も、幼い時から人によかれと思うやさしい感情に、また、りっぱな行ないをさえ、やりとげようということにいつも向けられてきたのだ。しかし6年来治る望みもない状態におかれ、無能な医者のために悪くされ、治る望みを年々に裏切られ、しまいには慢性のものと認めなければならなくなったことを考えても見てくれ。熱烈な、生き生きした性分に生まれつき、社交の楽しみさえ好んでいたわたしが、早くも人々から遠ざかって、孤独な生活を送っていかねばならないのだ。わたしは、しばしばすべてのものを超越しようと望んだが、ああ自分の悪い耳の悲しい経験をくりかえすたびに、どれほど無惨に打ちくだかれたことか。しかもわたしは人々に向かって、もっと大きい声で話して下さい、叫んで下さい、わたしはつんぼです、ということができなかつたのだ。他人よりもいつそう完全であるべきわたしの感覚、かつては、もっとも完全で同業のもののごく少数しか持っていなかったような完全さであったわたしの感覚がだめになったことを、自分で発表することなど、どうしてできるだろうか。おお、わたしにはそんなことはできない。だから、わたしがお前たちのなかに喜んではいっていきたい時でも、お前たちをさけるように見えることがあっても、許してもらいたい。わたしの不幸は、そういう場合に人から誤解されるに違いないので、2倍になされるのだ。わたしは人々と交わり、やさしい会話をし、お互に意見をはき合って楽しむことはできないのだ。まったく独りで、止むを得ない必要がある時だけ、ひとなかへ出ていくのだ。わたしは、追放された人間のように暮らさねばならない。わたしはひとなかに近づくと、おおわたしはわたしの故障を人に悟られやしないかという恐ろしい心配がわたしをおびやかすのだ。わたしがこの半年、田舎で暮したのもそういうわけなのだ。人なつかしい気持ちにしばしば負けてその誘惑にいざなわれたこともあったが、聴覚をできるだけいたわるようにという賢明な医者のすすめが、わたしの今の自然な気分と一致したのだ。しかし、わたしのそばに誰かが立っていて、そして遠くからの笛が聞こえるのに、わたしには何も聞こえず、また人々は牧人の歌が聞こえるのに、わたしにはそれもまた聞こえないとは何という恥しさだろう。このような経験はわたしをほとんど絶望させた。わたしは危く自分の命をたとうとした。しかし、ただ芸術、それがわたしを引きとめた。ああ、わたしは自分に課せられたすべての仕事を完成してしまわないうちは、この世を去ることは、とうていできないように感じられた。そういうわけで、この哀れな命を生きながらえているのだ。本当に哀れだ。ちょっとした変化が最良の状態から最悪の状態へわたしを落しこむことができるほど過敏な身体だ。忍耐。人々はそういう。わたしはそれを導き手にえらばねばならない。わたしは、それを持つている。冷酷な運命の女神が、生命の糸を断ち切るまではわたしの決意はつづかねばならない。わたしは、そう願っている。それはうまくいくかもしれない。しかし、わたしの覚悟はきまった。28才になったばかりで、哲学者にならなければならない。それは容易なことではない。芸術家にとっては、他の人々にとってよりもいつそう困難なことだ。神よ、あなたはわたしの内心を見透かされる。そして、わたしの心の底に、人間に対する愛と善行への願いのあることを知っておられる。おお人々よ、もしも君たちがいつかこれを読むならば、君たちがわたしに間違っていたことを考えるだろう。そして不幸な人は、同じような一人の不幸な人間が、選ばれた人および芸術家の列に入れてもらおうとして、あらゆる自然の障害にぶつかり、しかも、最善を

つくしたことを知って、自ら慰め給え。お前たちカールと……よ。わたしが死に、そしてシュミット教授がなお生きておられたならば、わたしの名によって、彼がわたしの病名を記述するようにたのんでくれ。そしてこの手紙を病歴にそえてくれ。そうすれば世間は少なくともわたしの死後、わたしと和解するであろう。同時に、わたしはお前たちを、わたしの小さな財産の相続人として認定する。正しく分け合い、一致し、そしてお互いに助け合いなさい。お前たちがわたしに逆らったことは、お前たちも知っているように、わたしはとうに許している。弟カールよ。わたしはお前が最近わたしに示してくれた好意に対しては、とくに感謝する。わたしの願いは、お前たちがよりよい、そして心配のない生活をしてくれることだ。お前たちのこどもには、徳ということをすすめる。これだけが人を幸福にすることができるのだ。金ではない。わたしは経験からいうのだ。惨めさのなかにおいて、わたし自身を保ってくれたものはこれである。芸術と同じく、わたしを自殺から救ってくれたのもそうだ。さようなら、互に愛し合ってくれ。すべての友に、リヒノフスキー公とシュミット教授に感謝する。

追悼の辞

1827年3月29日グリルパルツァーの朗読したもの

「故人の墓の前に我ら今立つて、全国の又、全ドイツ人の代表として、かくも高く称賛された人の死をいたむ。

まことに、ドイツ詩の英雄はなおも我らとともにある、又永く我らとともにとどまるであらう！ しかし、鳴りひびく歌の巨匠、音の芸術に表現を与えた甘き唇、ヘンデルの、バッハの、ハイドンの、又モーツァルトの不朽の名声の後継者であり相続人であるこの巨匠はその人生を閉じた。我ら今、この黙せる楽器の傍に立つて泣く。

黙せる楽器！ かく呼ぶ事を許し給え！ 彼は芸術家であり、彼の凡ては彼の芸術の力により成った。人生のとげは彼に深き傷を与え、難破舟の岸によりすがるとく、彼は上より来る善と真実の輝ける姉妹、なやむ者の慰め主なる芸術の腕にとび込んだ。

彼は神に固くすがり、神が彼の心にはいり、彼に語り給いし、その門が閉された時でさえ、彼の聲の故に神の与え給いし未来が暗黒になった時でさえ、尚も彼の心に神の御姿をいだき、彼の息たえた時も彼の胸になおそれをいだいていた。

彼は一人の芸術家であった。誰かよく彼の荷を担い得る者があるか？ 巨獣の大洋を駆ける如く、彼は彼の芸術の領域を跳び越えた。鳩のささやきより雷の轟まで、彼の自己決定手段の微妙な織り合せから大自然の斗う力の無法なまでの暴力の中に意識的に融合される芸術の荘嚴の極みまで、これら凡てを彼はその巨大な歩みの中に取り入れ、使い果した。彼の後継者の誰も之をつぐ者はない。その故は先人なる彼が芸術そのものが終着しななければならない処で世を去ったからである。

彼は一人の芸術家であったが、又一人の人間であった、あらゆる点において又、最も高い意味で。彼がこの世から断絶した故に、人々は彼を悪意ある者と呼び、又、彼が感情を避けた故に人々は彼を無情なる者と呼んだ。おー、困難なるを知っても逃げ去らない人！ 最も精巧な部分がたやすく鈍らされ又、破られた。過度の感受性が感情から後退した。彼の愛する自然の全域の中に、それに反する何の武器も見出し得なかった故に彼は世を避けた。人々に凡てを与えた後、その報いとして何も受けなかった故に彼は世を離れた。第二

の自己を見出し得なかった故に彼は孤独であった。然し、彼は彼の墓にまでさえ人間的な凡ての者のため人間としての心を保ち、彼の親族の凡てに父の心を、そして全世界へ彼自身一つの財産となった。

かく彼は生き、かく彼は死に、かく彼は永遠に生きるであろう。

辞世 *Plaudite, amici, Comoedia finita est.*

ベートーヴェンが死の床で聖さん式を受けて心からの感謝を司式された牧師に捧げた後病室にいたシントラーやブロイニングに向かってこの辞世とも考へられる「諸君、喝采したまえ、喜劇は終わった」と言った。

「喜劇」という言葉がある者は、教会にもあまり出席していなかった不信仰のベートーヴェンが死の床で聖なる儀式を受けたその事が滑けいであったと言う意味で聖さん式が終わった時このように言ったのだと説明し、又ある哲人は苦難と波乱にみちた生涯の果て、ある茶人が「はい、さようなら」と辞世の句を読んだのと同様の意味であったと解く。音楽人の中にもこの真意を解しかね、ベートーヴェンを無神論者とし、彼は人生を茶化してしまつたとする者もある。しかし、シントラーによると、最後の日が近づくにつれ、ベートーヴェンの心は平和に満ちていたと記している。

2月27日第4回の手術を受けた後、ベートーヴェンは不吉な予感の言葉を口にした「自分の一生もこれで終りだ、まだ医者か役にたつとすれば、その医者かの名は **Wonderful** と呼ばれよう」と英語で言った。これは G. F. ヘンデルの『メサイヤ』中の「再びわれに健康を恵みたまう者の御名、それは全能者なり」の旧約聖書の1句を心にうかべたのであろう。

ISAIAH Chapter 9 verse 6.

For unto us a child is born, unto us a son is given : and the government shall be upon his shoulder : and his name shall be called Wonderful, Counsellor, The mighty God, The everlasting Father, The Prince of Peace.

— King James Version (P 651)

セーヤーの *Life of Beethoven* によると、26日の夕、激しい雷光にベートーヴェンは目を開き、右手を挙げて数秒間かれの握りしめたこぶしを見つめた。そして彼はあたかも「悪の力よ、退け、神は余とともにいます」と司令官がためらっている兵士達に「勇気を出せ、前進だ、余を信ぜよ、勝利は確保されている」と言っているようであった。(第2巻1050頁)

古典やシェクスピアーを愛読したベートーヴェンは、たとえ、人生を劇と考えたとしても **Comedy** と **Tragedy** の区別は明瞭であったはずである。ほとんどの日本語訳と日本人著のベートーヴェン伝にこの **Comedy** が喜劇と書かかかれている。ギリシヤの昔から **Comedy** は **happy end** をもつものである。3年前(1966年)イタリーのフローレンスに遊学した時、ダンテの生い立ちの地で彼の作品にふれた折「神曲」が原名 *Divina Comedia* である事を思い出し、ドウオムの前にあるダンテが洗礼を受けた御堂の扉に立つた感激は忘れる事の出来ない一つである。

次に *finita est* である。ベートーヴェンは疑もなく **BIBLE** (聖書) にふれ、その中か

ら、いくつかの聖句を心の中に止めていたと考えられる。そして、これらの聖なる言葉が青年時代を通じて彼が出会った幾多の悩を切りぬける心の支柱となった。新約聖書の中の十字架上の七言の第6言は英訳「It is finished」である。

英米の **Commentary** の共通した解釈は「完成した」と言ふことである。

おそらく、病床でルートヴィヒ・ベートーヴェンが最後に残した言葉の意味は「神の与えたもうた余の人生は、数多くの苦難にもかかわらず、御憐みと御慈しみにより最後の聖さん式を受ける事が許され、実に幸いな人生のフィナーレを感謝をもって終る」

であったと彼のラテン語に彼の霊の遍歴、即ち信仰歴を加算し私訳をあえて発表する次第である。

BIBLIOGRAPHY

- Elliot Forbes : Thayer's Life of Beethoven
Princeton Univ. Press, 1967
- Michael Hamburger : BEETHOVEN, Letters, Journals and Conversations
Thirty Bedford Sq. London, 1966
- O. G. Sonneck : BEETHOVEN, Impressions by his Contemporaries
Dover Pub. Inc. , New York, 1954
- Burnett James : Beethoven and Human Destiny
Phoenix House, London, 1960
- Ernest Newman : BEETHOVEN CREATOR
Dover Pub. Inc. , New York, 1964
- Stanley Sadie : BEETHOVEN
Faber and Faber, London, 1967
- Paul Nettl : BEETHOVEN HANDBOOK
Frederick Ungar Pub. Co. , New York, 1967
- Henry Ed. Krehbiel : BEETHOVEN, The Man and the Artist, as Revealed in His Own Words
Dover Pub. Inc. , New York, 1964
- 諸井三郎 ベートーベン 旺文社
大築邦雄 ベートーヴェン 音楽の友社